

賢い患者になるために

1 病院で「いい患者」演じないで

2 医師説明後、看護師にもう一度聞こう

診察室で、「こんなこと、先生に尋ねていいのかな」と迷うことはないですか。

例えば、通院で抗がん剤治療をすることになった場合、仕事の合間に車で通えるのかどうか。子宮頸がんで円錐手術を受けた後の夫婦生活はいつから始めていいのか。

病院を出たら、患者さんには日常生活が待っています。確かに

に病気は大きなことです。でも、仕事もあります。毎日の掃除や洗濯もあります。子どもの弁当をつくることもあるでしょう。抗がん剤の副作用で指先がしびれるし、疲れやすい。耳鳴り、味覚障害……。どれも嫌な症状も、どの程度までなら我慢してもいいのか、どんな場合に病院に行かなければいけないか。どういう状態なら「正常」で、何が「異常」なのか。よく

と思うかもしませんが、伝えないと、医療者にとって「無いこと」になってしまいます。指示のしびれなら手袋をすれば少し改善するとか、アドバイスで

分からぬから不安になります。外来に電話で尋ねられる患者さんも少なくありませんが、

自分の体の変化が分かると、そ

の不安感もいくぶん、和らぎます。

医師には言いにくいこともあります。医師から、「何で

気になつたらと考えても、「先生に嫌がられるかもしれない」

と口にできないことも多いと思

う。医師の説明の後で、同席して

いた看護師に、もう一度聞いてみませんか。

(詳細はアスパラクラブで)

井沢知子 看護師



いざわ・ともこ
看護師免
許を取得して数年間の臨床
経験を経て04年兵庫県立看
護大大学院修士課程修了。
03年に米国リンパ浮腫セラ

ピスト、05年に日本看護協
会のがん看護専門看護師の
資格を取得し、現在、京都
大学医学部付属病院に勤務。